

---

# 彼の決断

はなちょこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼の決断

### 【Nコード】

N2566M

### 【作者名】

はなちよこ

### 【あらすじ】

「友人の田辺が結婚したの相手はものすごい女性だった」  
主人公が見た友人の結婚生活とは？！

「お邪魔しまーす」

俺はそう言うのと辺りをキョロキョロ見渡した。  
以前の田辺の家の玄関と全く違う。

「いらっしやいませ。さあ上がってください」

そんな可愛らしい声と共に目の前に現れたのは  
その辺のアイドルなんかより100倍くらい可愛い女性だった。

「えっと……貴方が」

俺が目の前の彼女に見とれながら、そう言う

「ああ。これが俺の奥さん」

部屋の奥から田辺が現れてニツコリ笑いながら言った。

「はじめまして。藍です」

藍さんはペコリとお辞儀をした。

「はじめまして。鈴木です」

俺もつられてお辞儀をする。

「玄関なんかに入らないで中に入れよ」

田辺の言葉に中へ入るとリビングに通された。

リビングのドアが開いた瞬間。

俺は倒れそうになった。

それは以前の彼の部屋を知っている者なら皆、驚くことだ。

だって独身の頃は足の踏み場もなかった上に異臭までしていた  
リビングが……。

今は綺麗に掃除されているところかピカピカ。

家具などは買い換えたのかまだ新品で、絨毯はふかふか。

もちろん隅々まで掃除が行き届いている。

さすが結婚すると違うんだな……。

俺がそんなことを考えながらリビングを眺めていると。

「立ってないで座れよー」

田辺の言葉に俺はソファーに腰掛けた。

ふかふかのソファー。

テーブルを挟んだ目の前にやたらと大きなテレビ。

「コーヒーで良かったですか？　もし飲めないなら紅茶もありますよ」

藍さんはそう言って慣れた手つきでテーブルにコーヒークップを置いた。

「ああ。良かったです！コーヒー好きです！」

彼女の可愛さに俺の日本語がおかしくなった。

藍さんはクスツと笑った。

こんな可愛い子と、どこで知り合ったんだ……羨ましいな……

チラリと田辺を見るとコーヒーに3つも砂糖を入れている。

彼とは小学生の頃からの仲だが決して容姿がいいわけではない。

いや、むしろ……

小学校の頃は田辺が近づいていった女子は泣き出す、という始末で……

そして、それに加えて。

「田辺、お前また太ったんじゃないか？」

俺は砂糖を一つだけコーヒーに入れてスプーンでかき混ぜながら尋ねる。

「ああ。そうなんだよ。とうとう一〇〇キロ超えちゃったよ」

そう言った田辺の顔に全く緊迫感などは見えない。

「私、少しくらいぽっちゃりしてるヒロ君の方が好きだな」

藍さんが笑顔で言った。

いや、ぽっちゃりってレベルじゃないけどな。

「藍の作る料理な、高級レストラン並みの美味さなんだよ。だから、つつい食べすぎちゃって」

田辺がそう言いながらコーヒーを啜ったので、俺もコーヒーを一

口飲んだ。

「なんだこれ……すっごく美味しい……」

俺は思わずそう言ってしまった。

「そうかそうか！ コーヒー通のお前に誉められるなんてかなりのもんだ」

「ありがとうございます。おかわりありますからね」

「ああ。そういえば今日の晩ご飯、お前も食っていくか？」

田辺の言葉に俺はチラリと藍さんの顔を見た。

「どうぞどうぞ。今日はビーフシチューと蟹クリームコロッケ、それからサラダなんだけど嫌いじゃなければ食べてみてください」

藍さんが笑顔でそう言ったので俺は夕食をご馳走になることにした。

あんな美味しいコーヒートを淹れる奥さんが作る手料理を食べない理由がない。

それにしても……。

俺はコーヒーが大好きで週4ペースで様々なカフェに行っている。さらに美味しいコーヒーが飲みたくて海外にまで行ったが、これだけ美味しいコーヒーを淹れる店は、まだ片手で数えられるほどだ。

「お前の奥さんは元シェフかなにか？」

「いや。違うよ。そういう手に職はないよ」

田辺の言葉に俺は首をかしげた。

後で淹れ方を教えてもらおう。何かコツでもあるんだろう。

藍さんの手作りの夕食はビックリするほど美味しかった。

最近、田辺を外食に誘っても全く乗ってこない理由が分かった。

こんな美味しい料理を毎日、食べていたら、どんなに評判の店だろうが三ツ星レストランだろうが

家で食べる料理の方が美味しいと感じてしまう。

藍さん、以前はどこかの有名レストランで働いていたんじゃないんだろうか。

「ヒロ君、お風呂わいたよ」

食後のコーヒーを飲んでいたら藍さんがキッチンから戻ってきて田辺にそう告げた。

「ああ。今日は後にするよ。もう少し鈴木と喋りたいから」

「分かった。私はまだやることがあるから、二人でゆっくり話してね」

藍さんはそう言うリビングを出て行った。

「奥さんも毎日あんな料理食べてるんだよね？」

「そうだよ」

「それなのに、なんであんなに細いんだ？　ってゆーかスタイルもすごくいいよな」

「だろ？」

田辺は嬉しそうにそう言った。

俺はコーヒーを一口飲んでから言った。

「完璧すぎるよ……外見も性格も家事も完璧なんて……」

「……」

「そりゃあ、お前」

田辺はそこで一旦、言葉を切ってリビングのドアに目をやった。

藍さんが入ってくる様子はない。

田辺が続ける。

「藍はそういう風に作られたんだから」

「作られた？」

俺は思わずそう聞き返した。

「ちょっと待ってる」

田辺はそう言うリビングの棚の引き出しを開けて何かを取り出した。

パンフレットのようなものを持って戻ってくるとそれをテーブルの上に置いた。

パンフレットには沢山の女性、しかも美人ばかりが表紙になっていた

『貴方の未来の奥さんはここにいます!』と金色の文字で書かれていた。

しかし驚くのはそこではなかった。

「アンドロイド妻パンフレット」

田辺がパンフレットの表紙に書かれた文字を読み上げた。

「まさか……………」

「そう。藍はこれ」

田辺はパンフレットのページをめくりながら言った。

彼の手が止まったページに目をやると、藍さんそっくりな女性が写っていた。

その女性を囲むように細かい文字でぎっしりと説明が書かれてあった。

『アンドロイド妻NO.3 藍』

ページの上にはそう書かれてあった。

「藍はな、一番得意な家事が料理なんだ。日本料理はもちろんフランス料理に中華料理、イタリア料理、インド料理まで。作れない料理はない」

田辺は一人で頷きながら言った。

「アンドロイドなんて……………嘘だろ……………」

「嘘じゃねーよ。考えてもみる。あんなアイドル並みに可愛い奥さん、俺がもらえと思うか？」

「……………それはそうだな」

「そこで納得したか。ま、いいや。これからの時代、妻は金で買っただよ」

「いくらしたんだ？」

田辺は俺の質問にパンフレットを指で指した。

そこに値段が書いてあった。

「ああ。思ったより無茶な金額じゃないんだ……………」

頑張れば俺にも買えないことはないな。

「……………ってお前。これで藍さんを買って、その上、新品の家具まで揃えたってのか?!」

「いまキャンペーン中だ。抽選で当たるとクーポン券がもらえるんだよ」

「へえ。キャンペーンもやってるのか」

俺はそう言うと考えこんだ。

田辺がそんな俺を見て言った。

「アンドロイド妻は人間じゃない。作り物だ。でも完璧なんだ。外見も性格も家事も何かもが。しかもメンテナンスをすれば、あの若さと美貌、それからスタイルも半永久的に保てるんだ」

俺は田辺の話を聞きながらコーヒを一気に飲み干した。

そしてポツリと言った。

「俺も買おうかな」

俺の言葉に田辺が目をキラキラさせて言った。

「本当か?! 俺の紹介で鈴木がアンドロイド妻を買えば、紹介料として藍に新たなオプションをつけてもらえるんだ!」

「オプションってなんだ?」

「それはな……………」

ぶっん。

そこで映像が切れた。

テレビの画面は真っ暗になった。

「あ、あとちょっとだったのに!」

中年の男がそう言って椅子ごと、くるりと後ろを振り返った。

「社長、このCMを何回見るつもりですか?」

リモコンを持って立っている女性がそう言った。

「自分の会社のCMを何度見ようが私の勝手じゃないか」

「それより決めていただきたいことが沢山あるんです」



「そう言えばそうだったな……」

社長と呼ばれた男は手元の資料に目を落としてそう言った。

「それからマスコミが結婚しない男性が増えたのは我が社の影響ではないか、と報道しております」

「マスコミの連中なんて気にするな。あいつらは金でなんとかなる」

男は資料に目をやりながら続けた。

「それより例のものは進んでいるのか？」

「アンドロイド夫のことですか？ あちらはまだ試作品の段階ですが順調のようですね」

女性は少しだけ穏やかな口調になって答えた。

「それならいい。女共がうるさいからな……」

男はそう言うのと額の汗を拭った。

「それではまたなにかありましたら、お呼びください」

女性はそう言うのとドアに向かって歩き出した。

彼は社長室を出て行くの女性の後姿を見つめていた。

完璧な「アンドロイド秘書」

実は彼女は元々は人間の女性だった。

しかし彼女は病気のため、あまり長くは生きられない状態にあった。

その時、彼は思いついたのだ。

彼女の記憶だけをアンドロイドに移植し「アンドロイド秘書」にしたのである。

彼は優秀な秘書を持つことができ、彼女は新しい体を手に入れることができた。

「社長、お薬の時間です」

七時きっかりに秘書が薬と白湯を持って社長室に現れた。

「ありがとう」

社長はそう言うのと薬を喉に流し込んだ。

ふう、と息をつき彼は独り言のように呟いた。  
「私にも新しい体が必要だな・・・」

（おわり）

（後書き）

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。

これは2009年12月23日に書いたものです。  
クリスマスっぽいお話を、と思ったんですが……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2566m/>

---

彼の決断

2010年10月8日14時30分発行